



井戸から溢れる地域再生の呼び水

(浦賀・井戸再生の現場を訪ねて)

灼熱の日差しが降り注ぐ8月の某日、筆者は“黒船来航の町”として知られる神奈川県横須賀市浦賀を訪れました。品川から京浜急行に揺られること約1時間。浦賀の駅に着くや否や、視界に飛び込んできたのが、入り江にそびえる巨大な工場です。ブルーの屋根が映える美しい建物ですが、10年ほど前に住友重機械工業が撤退したことにより、今は主を失った沈黙の工場となっています。ただその存在感は圧倒的で、浦賀がかつて造船で栄えた町であることを我々に訴えかけてきます。



入り江にそびえる造船工場（閉鎖）

今回、筆者がこの地を訪れたのは、以前から関心があった古井戸の再生プロジェクトについて取材するためです。新聞記事が伝えるところによると、浦賀、鴨居の2地区で行政センターと町内会が一体となった井戸の再生が進められていて、それが福祉や防災の面で効果を発揮しているとのこと。そこで浦賀行政センターに浅井勝美さん（地域コミュニティ係）を訪ねたのですが、幸いにも同プロジェクトの誕生にかかわった新町町内会の元会長、高橋直道さんを紹介していただくことができました。

横須賀の郷土史によれば、浦賀には大正中期まで、船に水を売る“水屋”が存在したそうです。また、江戸時代には幕府が所有する初代軍艦・威臨丸に水を供給した史実があることから、もともとこの辺りは水に恵まれた土地柄であることが窺えます。浅井さんのお話によれば、浦賀・鴨居地区だけで個人の所有物を含め300本を超える井戸が存在するのだそうで、そのうち

166本が現在も使用されているとのことでした。一方で、水道の整備が進んだことや、造船工場の閉鎖などを背景に過疎化が進行したことによって、使われない井戸が近年増えてきたのだといえます。井戸はご存じの通り、定期的に内部の清掃（井戸替え）をしなければ衛生状態が保てません。それこそ長い期間放置しようものならば、水は腐り、強烈な異臭を放って、人を寄せ付けない“死に井戸”になってしまいます。

そんな地域の財産が失われつつある現状を憂慮し、「井戸の再生」を唱えたのが高橋さんでした。新町の東耀稲荷前の古井戸をターゲットに、平成13年7月、井戸替えを地域住民に呼びかけたのです。

「とにかくコミュニケーションの場を復活させたかった」と、高橋さん。東耀稲荷前の井戸は新町地区では比較的大きいほうで、昔は近所の住民がひっきりなしに足を運んだといえます。例えば畑で獲れた野菜を洗ったり、お米を研いだり、あるいは庭に撒く水を持ち帰ったりするのが日常だったそうです。そうやって住民同士顔を合わせる機会が多かったぶん、昔は互助の精神が強く、それが地域の治安維持や防災の礎になっていました。

それから高橋さんが心配しているのが孤独死です。最近は新町町内でも過疎化が進み、空き家がポツリポツリと目立つようになりました。お隣さんの変化に周囲が気付かなくなったとき孤独死は現実味を帯びてきますので、コミュニケーションの維持が重要です。ですから一刻も早く井戸端会議を復活させ、若い世代も交えた新しい地域のつながりを作ろうと考えたそうです。

さて、東耀稲荷前で行われた井戸替えの日。高橋さんの呼びかけに対して、期待を上回る30人以上の住民が集ったといえます。「そんな人数が顔を出すのは、最近の集会では異例のこと」（高橋さん）。はじめは井戸に入ることを渋っていた者も、いざ中に入ると水との触れ合いが楽しくなり、作業は和気あいあいとした雰囲気が進んだといえます。そして、井戸替えの技術を長老から若者へと引き継ぐ目的もまた、無事に果たされました。

こうして復活した井戸は、水道水を利用するのが勿体ない雑巾がけや植木の手入れ、飼っている金魚の水替えなどに使われるようになり、井戸の周りには徐々に人が集まりはじめたといえます。また、東耀稲荷を

訪れる観光客にも変化が見られるようになりました。夏季は熱中症対策としてハンカチを濡らし、顔に押し当てたり、頭からかぶったりする光景が見られるようになったのです。



ポンプを操る高橋さん（東耀稲荷前）

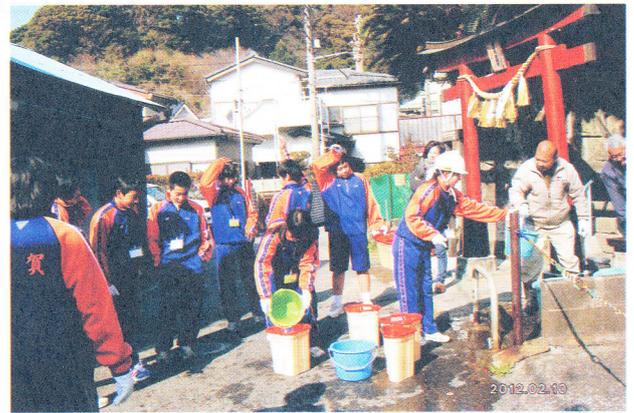
さらに、共同の水場が復活したことで、その使い道についてアイデアも湧いてきました。今、新町町内会で推進したいと考えているのは、空き家の利用です。誰も住んでいない家の庭にきれいな草花などを植えて、その水やりに井戸水を使おうという計画です。また、町内会の催しでは、井戸水を使った流しそうめんなどのプランも練られているそうです。

このような井戸の復活による町の変化は、行政をも突き動かす結果となりました。改めて地元の水資源を見直す中で、今度は「災害対策に活かそう」との発想が出てきたのです。具体的には、浦賀・鴨居地域協働推進協議会の中で、まず、地域にある井戸の実態調査を行って「井戸まっぷ」を作成し、それを地域に配布するとともに、調査の結果判明した再生可能な122本の井戸を順次蘇らせ、現在使用中の井戸と合せて災害時の生活用水を確保しようという計画で、平成22年に立ち上がりました。その音頭をとったのが行政センターで、井戸替えに必要な機材はすべて赤十字奉仕団浦賀分団で調達して町内会に提供し、同年度内に3本、翌年度に7本の井戸を復活させてきたといいます。

そうした中で発生したのが記憶に新しい東北大震災です。高橋さんはこの日のことを振り返って、「水の確保の重要性を改めて認識した」と言います。浦賀から電気が消え



た日、コンビニすら開かない事態を目の当たりにして、「自分たちの水は自分たちで守る」と、改めて意を強くしたそうです。だからこそ、写真にも見られるように電動ではなく手押し式のポンプを採用し、災害時用飲料水製造装置（現在計16台）まで備えたのです。こうした防災意識は地域全体に拡がりを見せています。



浦賀中学生によるバケツリレー

浦賀中学校は毎年2月になると生徒たちを各町内会に割り振り、実践的な防災訓練を積み重ねています。新町町内会が用意するメニューは「バケツリレー」で、これが先生や生徒たちから「楽しく技術が習得できる」と好評です。その要因は水に触れるの喜びにあるのでしょうか。多少の悪ガキも、ポンプ係を任せてみると一心不乱に取り組むのだそうで、却ってそういう生徒ほど負担の大きいポンプ仕事を「最後までやりきる」（高橋さん）のだとか。そして、「訓練を終えると表情が段違いに良くなっている。先日は、私のところに駆け寄ってきて、挨拶をしてくれました」と、高橋さんは目を細めます。

今回、お二人のお話を伺って、筆者は改めて、地域に老若男女を交えたコミュニティがあることの大切さを知りました。「緊急時にどう動くか」は本人次第の面があって、マニュアルに示せないことが少なくありません。「あそこに足の悪いおじいさんが住んでいるから、様子を見てこよう」。そんなふうを意識できるか否かが重要です。また、事が起こってから「防災用水はどこだっけ？」では困ります。その点、日常的に人が集まる場所（井戸）が防災拠点になる浦賀・鴨居地区は、少なくともその心配は無用でしょう。

取材もほぼ終わり、高橋さんらと井戸の前で打ち水をしていた時、路地の向こうから自転車に跨った少年がやってきました。少年は筆者と面識がないにも関わらず、軽く会釈をして通り過ぎていきました。

潤いを湛えた路地には一陣の心地よい風が吹きました。

（筆者：中山 勲）